

(公財)神戸大学六甲台後援会だより (40)

官立神戸高等商業学校の夜学部講習について

表題の夜学部が他の官立学校に無い独自な試みで総計9千人近い人達に勉学の機会を与えたことは、昨年ホームカミングデーのとき、本会の新野特別顧問も触れました。ところが、それも契機となって、ありがたいことに大正12年12月に発表された「夜学部講習者募集」とその根拠となる「夜学部規則」が本会に届けられました。本学経営学部昭和32年卒の吉田昭彦氏が、神戸高商卒だったご尊父の書類を整理していたとき発見されたものです。

この「夜学部規則」によりますと、この講習期間は2カ年で、今日多くの大学で実行している公開講座とは全く違って、夜間短期大学といってよいような画期的な試みでした。すなわち、1学期を3カ月ごとの6学期に分け、講習科目は、会计学、商業英語、商工経営、銀行論、貨幣論、金融論、財政学などのほか、民法、商法、破産法をはじめとする22科目にも亘りました。1科目の授業は15回、1回の授業時間は2時間(すなわち、1時間50分を2回)ということになっていましたから、各学科ごとに原則として30時間の授業を受けることになっており、受講者は各学期ごとに最低2ないし3科目を受講し、6学期を通して15科目以上は履修しなければならなくなっていました。

受講者は、中学校または甲種商業学校の卒業生か、学校当局

の方で、これと同等以上の学力を有すると認めたとされ、興味深いことに、特に受講者選考試験は無く、原則として申し込み順となっていました。申し込み順によらない受講者の収容もあると定められていました。

さらに、受講者のうち、特に学力証明を希望する者については、別に学力検定試験を受け、それに合格するとその科目の合格証明書が授与され、15科目以上合格すれば、全科合格証明書も授与されると定められていました。残念ながら、こうした科目ごと及び全科合格者が何人いて、それがどのような社会的な評価を受けていたかを立証する資料はまだ入手できていません。しかし、平井泰太郎先生が執筆された有名な著書『水鳥鍬也』によりますと、この夜学部は大正2年5月から始められ、昭和3年10月まで続けられたということになっています。大学進学率が50%近くになっている今日とは違って、大学やその他高等教育校の進学率がまだ極めて低く、勉学の機会が渴望されていた当時、神戸高商の夜学部講習が極めて高い社会的評価を受けたことは推測できます。平井先生は前掲著で、最初に触れましたように全受講生が9千人近くに及んだと述べておられますが、官立の高等教育機関でこういう夜学部の設立が無かった時代、わが神戸高等商業学校の先駆的な開拓というのは、高く評価できるものであったことは間違いないと思います。

もっとも、この夜学部開設にあたって文部省からどのような予算措置がとられたのかは残念ながら判っていません。「夜学部規則」によりますと、1科目の聴講料は3円、これに1科目加えることに2円と決められています。それで講師報酬や夜

学部運営費が保障されたとはとても思えません。学校当局及び担当された先生方にとつてもかなり大きな負担になっていたのではないかと推測されます。

ところが、神戸高商では、こういう困難があったにも拘らず、教育の機会均等を念願してこれを断行し、戦時中には修業年限1年の「特設講座」も開設しました。これが結局神戸経済大学に全国の国立大学で初めて第2学部、のちに第2課程と改称された夜間学部を開設するきっかけとなったことを考えると、水島先生の英断は、やはり特筆に値するものであったことは間違いないと思います。

平井先生は前掲書の中で、第2学部は従来の神戸経済大学の教員組織とは別の独立した組織にしようとしたのに、文部省は10講座増やしただけに止めたため、授業担当は、従前の神戸経済大学の教官が兼任で行わなければならなかったことを述べておられます。ともあれ、旧制大学時代の第2学部は、昭和25年卒の第1回から、昭和28年卒の第4回生まで、さらにそのあと新制大学になってからは第2課程として、法・経済・経営の3学部ごとに設立されることになりました。なお第2学部及び第2課程は、敗戦後の苦しい経済状態が続いていた昭和22年及び昭和24年から開設されました。それもあって、有能であるが経済的困難のために入学された人も多く、卒業後ダイエーの内功さんのように実業界で素晴らしい業績をあげた人や、優れた学問的成果をあげ学会の会長や大学の学長などになられた方々も輩出しました。

なお、ご承知のように、経済成長とともにいわゆる勤労学生

といわれる人達が少なくなり、第2課程設置の趣旨とは異なるようになるとともに、大学における留学生や大学院学生数が激増し教員の授業負担増などもあって、わが神戸大学3学部でも長年続いてきた夜間学部制はなくなりました。国立神戸高商の全国最初の試みはこうして消滅することになりましたが、これに代わる神戸大学3学部ならではの独自の革新的企画を工夫する時ではないかと思わずにおられません。

今期も皆さんからのご寄附ありがとうございました

前号で報告させて頂いたあとも、本号の締め切り日までに多くの皆さんから貴重なご寄附を頂きました。また、毎年所得税控除手続きを可能にするために、社会科学系4研究科及び経済経営研究所の先生方をお願いしているご寄附についてお礼申し上げます。すなわち、法学研究科の先生方54名の16万2千円、経済学研究科の先生方51名で16万2千円、経営学研究科の先生方58名で17万4千円、国際協力研究科の先生方26名で7万8千円、経済経営研究所の先生方17名で5万1千円がそれぞれです。毎年、先生方には大変ありがとうございます。

次に、前号でご報告しました三四会（昭和34年卒の皆さん）の会員でその後にご送金くださった藻川恒夫様（経営）2万円、近藤晴彦様（経営）1万円、中永晋一郎様（法）3万円、浦井照之様（経営）10万円があります。また以上とは別に、次の方々のご寄附をいただきました。松岡三郎様（昭35経済）10万円、稲垣滋様（昭45経済）10万円、八瀬正道（溝口ゼミ）様（昭40経営）3万円などがそれぞれです。これで前号以降に計101万7

千円を頂いたこととなります。皆さん本当にありがとうございます。事務局としても、こういう皆さんの母校支援のお気持ちを実際に生かされるよう先生方と一体となって運営に努めたいと思いますので、今後ともどうかよろしくご協力の程お願い申し上げます。

毎回お願い申し上げます。寄付金の送り先は左記の通りです。よろしくお願い申し上げます。

◎銀行送金の場合（銀行からの通知がどうしても遅くなり、領収書等のご送付が遅れる可能性がありますので、是非ご送金のことを事務局にご一報ください）

銀行名 三井住友銀行六甲支店

口座番号 普通預金 4069496

大学文書史料室から(14)

附属図書館大学文書史料室長補佐 野 邑 理栄子

神戸高商における門戸開放の偉業

―なぜ出光佐三は神戸高商に入学したのか―

日露戦争下の1905（明治38）年、満19歳の出光佐三（出光興産創業者）は、福岡市立福岡商業学校を卒業し郷里福岡県を離れ、5月1日神戸大学の前身である官立神戸高等商業学校（神戸高商）に入学した。出光たち神戸高商第3回入学生は全

口座名義 公益財団法人神戸大学六甲台後援会

◎郵便振替の場合（通信欄に卒業年次と出身学部をご記入ください）

口座番号 00980-9-116772

口座名義 公益財団法人神戸大学六甲台後援会

〒657-0068

神戸市灘区篠原北町4-11-5

公益財団法人神戸大学六甲台後援会事務局

電話・FAX (078) 861-3013

E-mail: rokodaiund@kobe-u.com

123名、うち中学校出身者は82名、商業学校出身者は41名であった。

なぜ出光は、先達の東京高商（現在の一橋大学）ではなく神戸高商を選んだのか。理由は多様だろうが、ただ一つ確実なこととは、当時、神戸高商だけが、出光のような商業学校出身者にも広く門戸を開いていたという事実である。商業学校出身者は進学機会が極めて少なく、商業学校を卒業すればすぐに就職するのが常であった。例えば、東京高商では、中学校出身者だけが有利となる入学試験を実施し、商業学校出身者にも同じ「中学校卒業ノ程度」の入学試験を課して進学を厳しく限定した。そのため東京高商では、出光の翌年に入学した全271名のうち、商業学校出身者はたった4名（1.5%）という状態であった。